

科研B「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と
通言語的学習達成度評価法の総合的研究」

【第3回研究会】

2013年2月1日（金）語学研究所
東京外国語大学 世界言語社会教育センター
富盛伸夫

紹介：“*The Common European Framework of Reference
–The Globalisation of Language Education Policy–*”,
Edited by Michael Byram and Lynne Parmenter,
Bristol: Multilingual Matters, 2012.

1. CEFR 策定における Byram 教授の役割

- Intercultural Communicative Competence (ICC) の重視と CEFR への組み込み、
- ICC の評価法の開発

2. CEFR の受容について：Byram 教授・Parmenter 教授の見解

「CEFR の導入を検討する研究や実践を見ていくと、しばしば CEFR をそのまま取り入れるのは日本の社会文化的状況と齟齬があるため、日本の現状に合わせて変更を加える必要があるという文言に出会う。たしかに、CEFR 自体が、その‘R’が明らかに示しているように、‘reference’「参照枠組み」であり、‘standard’「標準/基準」ではないわけで、多少の変更は必要であり、許容されるだろう。しかし、そこにはおのずとある程度の制限があるはずである。「参照枠」が‘common’であるための制限である。これは当然、CEFR の哲学、あるいは理念を形作る複文化・複言語主義であり行動中心主義であろう。つまり、CEFR をたとえば日本の外国語教育に導入する際、そこに何らかの変更を加えるとしても、常に複文化・複言語主義と行動中心主義という理念に矛盾しない変容であるように心を砕く必要があるということだ。そもそも CEFR の導入を志向する研究者や教育関係者は、その根底において CEFR の理念を咀嚼し、それを是としているはずだからである。しかし、現実には少し事情が異なるようだ。Parmenter & Byram (2010:15-16)は、日本の CEFR の受容の在り方について、次のように述べている。

‘...the lack of attention to the CEFR in policy discussions may simply be a reflection of the lack of awareness of the CEFR among many researchers and educators in the field of English education in Japan. ... Once the CEFR is up for discussion in the dominant circles of education policy, it will be the task of researchers / educators to ensure that policy-makers are fully aware that CEFR is much more than a set of levels of language proficiency.’ (下線は本稿筆者による)

しかし、このような状況は CEFR のお膝元でさえも同じく問題視されているようだ。(3.2. CEFR の哲学・理念の咀嚼)」

「日本の大学言語教育における CEFR の受容—現状・課題・展望—」（拝田清,2012.In 『EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究』(2012.3)

3. 著者の研究の方向性

・言語教育・言語学習を（異）文化間関係の習得のプロセスの中にすえて、言語学習と文化学習の相関性を分析する。言語教育をととして異文化間コミュニケーション能力の育成と評価法の研究。

4. 本書の構成：目次など参照

5. 本書の編集上の重点と新情報

- ・グローバル化する世界各国における CEFR の受容の実際・現状
- ・各国の言語教育政策の中での CEFR の適用、政策化の調査報告

6. 問題提起

- ・CEFR の何が理解され受容されているのか、どこが利用されているのか？
- ・CEFR 受容と導入の政策化とは？ 国レベル、各種検定、自治体、教育機関（中等教育や大学など）
- ・文化間教育と CEFR
「異文化間教育のアプローチでは、学習者の全人格形成と言語文化における他者の豊かな経験世界に呼応した自己のアイデンティティの感性を、適切に育成することが言語教育の中心的目標である。」
＝フンボルト的な人格形成 (Bildung) (1836)
- ・ヨーロッパの多様性と文化価値の再認識
＝複言語主義

7. その他

- ・参考：Claire Kramsi の「borrowing と lending」の双方向性を強調